

---

**遊 戯 王5D's 外伝 スピリッツ・クロス**

1484

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯 王5D's 外伝 スピリッツ・クロス

### 【Nコード】

N6882V

### 【作者名】

1484

### 【あらすじ】

シグナー達の活躍で、ゴドウィンの野望が打ち砕かれ半年。ネオ・ドミノシティのデュエルディスクが一斉に動作不良を起こした。

そして、不動遊星は、この事件の真相を探るある一人のデュエリストと出会うのだった。

これは、英雄の魂を宿す青年と、赤き竜の力をつぐ者の、ひと時の決闘の物語。



## 主人公設定

主人公：有<sup>うじょう</sup>条 遊<sup>ゆうじ</sup>次

年齢：22

使用カード：S・HERO ペンドラゴ

S・HERO マサムネ

ネームレス・ソルジャー

スピリッツ・シグナル e t c

### プロフィール

世界を股に掛けるバック・パッカー・デュエリスト。

旅の資金繰りの為に各地のデュエル大会に参加し、優勝している。

そのためデュエリスト達の間では有名人で、熱狂的ファンも多い。

使用するデッキは<sup>スピリッツ・ヒーロー</sup>S・HERO。

カードの精霊が見え、会話できる。

時にはその能力を活かし、オカルトめいた事件解決の依頼も受け付ける。

今回は海馬瀬人の依頼でネオ・ドミノシティを訪れる。

### 「S・HERO」

遊次が使用する主力モンスターたち。

十代などが使うヒーローとは違い神話や物語に登場したり、なかには実在した「英雄」をモデルにしている。

このカードたちは遊次の親友がデザインしたもので、世界に二つとないデッキ。

そのためか、モンスター一枚一枚に精霊が宿る。

中でもマサムネは常に遊次の隣にいる。

## 主人公設定（後書き）

スピリッツ・ヒーローは、言うまでもなくオリカです。

英雄を使おうと思ったのは、FATEの影響を受けてますかねorz  
ちなみに、遊次のイメージCVは森田成一さんです。

TURN 1 英雄の再来 S・HERO(前書き)

ガツチャー!!作者です!!

ようやく一話完成・・・(涙)

長かった。

それでは、駄文ですがお楽しみください!

「デュエルディスクが動かない？」

その日、いつもどおりD・ホイールの整備をしていた不動遊星の元に、学校帰りの龍亞が駆け込んできた。

何でも、デュエルディスクの調子が悪く、起動しないらしい。

それも、自分のものだけでなく、彼が通うデュエルアカデミア全員のものがそうなってしまったらしい。

「そうなんだよ……俺のだけなら扱いが悪かったで納得できるんだけど、みんな一斉ってのはおかしいでしょ？」

「ああ、さつきから俺のD・ホイールも調子が良くない。これではライディングデュエルは無理だ」

一体この怪現象は何が原因なのか？二人で黙って考えているところに、更に一人やってきた。

ジャック・アトラスだ。彼はこの現象に腹を立てているらしく、手近なイスに強引に座り、踏ん反りかえった。

「どうしたのジャック？」

龍亞が聞くと、ジャックは深い溜息をついていった。

「どうもこうもない。遊星の新しいエンジンを試している途中で

俺のホイール・オブ・フォーチュンが止まったんだ。遊星、どうなっている？」

「分からない……。だがエンジンに不備はなかったはずなんだが……」

遊星が考え込んでいると、PCにメールが入った。

『デュエルディスクのことで話がある。ちょっと来てくれ。牛尾』

「遊星、これって」

「……少し行つて来る。ジャック、後は頼む」

遊星はいつものコートを羽織り、牛尾の元に向かった。

少しして、遊星は牛尾と一緒にいた。セキュリティの彼のデスクではなく、町外れの骨董品屋だ。

「いいか、俺の勘が正しけりゃ、これにはダークシグナーみたいなわけの分からん連中が絡んでる。でもないど町中のデュエルディスクが壊れるなんてありえない」

彼によれば、デュエルディスクの動作不良は町中で起こり、今ではデュエルをするものが一人も居なくなってしまった。セキュリティも原因究明に躍起になっているが、いまだなにも得られてはいない。

「それはさつきも聞いたが、なぜこんなところに？」

遊星の言葉が聞こえていないのか、返事もせず牛尾は店のものを物色し、何か大きめの箱を手に取った。

「あつたああ！これ、これくれ！！」

それを大慌てでレジに持って行き、会計を済ませ、店を出る。

そして買ったものを遊星に手渡した。

「これは？」

渡されたのはデュエルディスクのようだが、現在のものとはだいぶデザインが異なっている。

見た目は遊星のものに近いが、細部の色や形がかなり異なっている。

「初代デュエルディスクだ。俺が高校生のときに出たやつだからもうそれこそ骨董品だが、動力が違うから動くかと思っただけ」

「そうか……ありがとう牛尾」

「お前にはデュエルモンスターの力が必要だろう。それに、この事件はきつとシグナーのお前たちしか解決できない。不甲斐ないが、頼む遊星」

「ああ。任せてくれ。俺が絶対に解決する」

遊星は渡されたデュエルディスクを左手に装着すると、とりあえず起動してみた。

「どうやら、問題なく動くらしい。」

「よし、俺はサテライトの方を調べてみる」

「分かった。じゃあ俺も、怪しそうなところを探っておこう」

二人は別れ、事件の真相を探り始めた。

- - 同刻、ネオ童

実野シティ・ダイモンエリア -

「うあああ!!」

いま、まさにデュエルの決着がついたところだった。

勝った男のライフポイント表示は4000。すなわちノーダメーシである。

負けた男は白目をむき倒れている。

「これでようやく一人か」

『こいつが件のデュエリストの一人か？遊次』

突然、勝った男 - - 有<sup>うじょう</sup>条 遊<sup>ゆうじ</sup>次 - - の隣に、眼帯をした隻眼の剣

士が現れた。彼のカード、『スレリッツ・ヒーローS・HERO マサムネ』の精霊だ。

「ああマサムネ。こいつらが磯野さんの言っていたテロリスト……『アルテミス』の一人に違いない。例のサイコデュエルディスクを使っていたからな」

『カードを実体化させ、兵器にする……下衆のきわみだ』

「ああ……一刻も早く全員を叩き潰さないとな」と、遊次の携帯に連絡が入った。

海馬コーポレーションの社長秘書、磯野からだ。

「磯野さん、何かあったんですか？……分かった。すぐに戻ります」

『どうした？』

「俺のリクエストが通つたらしい」

遊次は、未だ白目を向いてる男からデュエルディスクを取り上げ、その場を後にした。

\*\*\*

海馬コーポレーション本社ビル。今までは眺めるだけで、中に入ったことなどはもちろんない。

だが今、遊星はそのビルのゲストルームのソファに腰掛けている。

「すまないが、なぜ俺をこんなところに連れてきたか、そろそろ説明してくれないか？」

サテライトを探索中、半ば強引に自分をここに連れてきた張本人、磯野に向かって話しかけるが、彼は沈黙を守り口を開かず、ドアの横で直立不動の像と化している。

遊星は諦め、何か時間をつぶせるものはないかと考え、先程牛尾に貰ったデュエルディスクの説明書を読み始めた。

現行のものとは違い、動力はモーメントを介さないバッテリー式のようなのだ。

さらにはオートシャッフル機能やオートサーチ機能はないらしい。

(少し不自由だが、まだ全然現役でもいけそうだ)

「へえ、それ、一番最初のデュエルディスクか。いいところに目をつけたもんだ」

突然、後ろから話しかけられ、遊星はとっさに身を翻し、身構えた。

「そう怖い顔すんなよ、俺は有条不紊だ。今回海馬コーポレーションの依頼でここに来た。よろしく」

遊次に敵意がないことを理解した遊星は、構えを解き「不動遊星だ」と自己紹介を返した。

「んじゃ、自己紹介もすんだしそろそろ本題に入ろうか」

と言つて遊次は遊星の前のテーブルに、デュエルディスクを置いた。

市販されてるものとは形が違うが、何かおかしいところがあるようには見えない。

「これ、なんだと思う？」

「デュエルディスクか」

「ああ。だが普通のものとは全く持つて違う。普通のデュエルディスクはあくまで玩具。だがこいつは兵器なんだ」

「なに？」

遊星には、遊次の言う意味が全く理解できない。なぜデュエルディスクが兵器になりえるのか。

だが、次の説明を聞いて、遊星は理解せざるを得なくなった。

「サイコデュエルディスク……俺たちはそう呼んでいる。こいつはテロリスト『アルテミス』によって製造され、モンスターやその他のカードの実体化が可能なんだ。しかも半径5キロ圏内のメンバーに接続する現行のディスクの動きを阻害するんだ。俺が捕まえた構成員の一人が言つてたんだが、サイコデュエリストの特殊な脳

波パターンを計測して作られたらしい」

遊星は、サイコデュエルの恐ろしさを身をもって経験していた。あんな力が、だれかれかまわず使用可能になれば……。そして遊星にはもう一つ不安要素があった。

「このデュエルディスクの製作に、アルカディアムーブメントは関与しているのか？」

「……分からない。でも、その組織の壊滅後、サイコデュエリストが裏社会に何人がまぎれたと聞いている。関連が全くないわけじゃないだろうな。もしかすると本物のサイコデュエリストも構成員に混じってるかもしれない」

遊星は知っている。サイコデュエリストたちの苦悩を。黒薔薇の魔女と恐れられた遊星の親友もまた、半年ほど前までは復讐に生きることしかできなかったのだ。

かつてのアルカディアムーブメントのような、非道な連中の集まりに、同じような人々が利用されているとしたのなら、彼にはそれをとめる義務があった。

「遊次、俺もこの事件の解決に協力させてくれ」

「端からそのつもりで呼んだけどよ……いいのか、危ない仕事だぜ？」

「俺のシグナーとしての力……それは、人々のためにあるものだと俺は思う。だから一緒に戦いたい」

遊星の決意。その固さを理解した遊次は、口元に微笑を浮かべた。

『こやつ、お前に負けず劣らず人が良いな』

「…だな。よし、じゃあまずはお前の実力、測らせてもらおうか  
!?!」

遊次はデュエルディスクを起動する。彼のディスクもデュエルアカデミアで使用される旧式のもののため、問題なく動く。

「卒業記念の奴をわざわざ引っ張り出してきたんだぜ？楽しませてくれよ!」

デュエリストが本気の視線をぶつけ合ったのなら、もうそこはデュエルフィールドだ。

遊星も彼の真意を感じ取り、ディスクを構えた。

「あなたの期待に答えよう」

「そうこないとな、磯野さん、合図を!?!」

ここではじめて、あの磯野が動いた。

彼は右腕を高く掲げて叫んだ。

「<sup>デュエル</sup>決闘開始!!!」

「<sup>デュエル</sup>デュエル!!!」

「先行は譲るぜ遊星」

「分かった、俺のターン、ドロー!!」

遊星は引いたカードと手札を確認し、最高の初手を導き出した。

「俺は手札を一枚捨て、クイック・シンクロンを攻撃表示で特殊召喚！」

「クイックシンクロン 5 攻700 守1400 チューナー」

「更に、クイック・シンクロンのコストとして墓地に捨てたレベルステイラーの効果発動！フィールドに 5以上のモンスターがいるとき、自分フィールド上のモンスターの を一つ下げ、特殊召喚できる！俺はクイックシンクロンの を一つ下げ、特殊召喚！」

「レベルステイラー 1 攻600 守0」

「クイック・シンクロン 5 4」

「そして手札からスピード・ウォリアーを召喚！」

「スピード・ウォリアー 2 攻900 守400」

「クイック・シンクロンの効果発動！このモンスターはシンクロンと名のついたチューナーの代わりにできる俺は 1、レベルステイラーに、 4となったクイックシンクロンをチューニング!!」

「集いし星が、新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンク  
口召喚！！いでよ、ジャンク・ウォーリアー！！」

「ジャンク・ウォーリアー 5 攻2300 守1300」

「ジャンク・ウォーリアーの効果発動！このカードのシンク口召喚に成功したとき、このカードの攻撃力は自分フィールドの2以下のモンスターの攻撃力分アップする！」

「ジャンク・ウォーリアー 攻2300 3200」

「俺はカードを一枚セットし、ターンエンド」

遊星：LP4000

手札 2枚

モンスター ジャンク・ウォーリアー スピード・ウォー

リアー

魔法&罫 一枚

「やるねー、1ターンで攻撃力3000オーバーのモンスター。  
久々に楽しくなってきたぜ！！」

「さあ、あんたのターンだ」

「ああ、ドロー！」

「俺は手札から、ネームレス・ソルジャーを攻撃表示で召喚！」

「ネームレス・ソルジャー 3 攻1400 守1200」

「ネームレス・ソルジャー…名も無き戦士か」

「ああ。すべての英雄たちが後世に語り継がれるわけじゃない。

中には、歴史の中に埋もれる者もいる。だが、必ず誰かがその意思を受け継ぐのさ！ネームレス・ソルジャーの効果発動！このモンスターを墓地に送り、手札からS・HEROスピリッツ・ヒーローと名のついたモンスター一体を特殊召喚する！行くぞ！S・HERO マサムネ！」

「スピリッツ・ヒーローS・HERO マサムネ 7 攻2500 守2000」

「スピリッツ・ヒーローS・HERO、知らないモンスターだ…」

「ああ。こいつは世界に一枚しかないモンスターだからな。こいつだけじゃない。他のS・HEROはすべて俺の友人が俺に託した、どれも大切な仲間さ」

遊星は、このとき久しぶりに胸が高鳴った。カードを愛する真のデュエリストと、自分の知らない未知のモンスター。これ以上に興奮するデュエルは二度と味わえないかもしれない。

「こい、遊次！俺が全力で相手をする！」

「おうよ！マサムネの効果発動！相手フィールド上のモンスターを一体選び、そのモンスターとマサムネ以外をすべて破壊する！俺はスピード・ウォーリアーを選択！さあ、ジャンク・ウォーリアーにはご退場願おうか！」

ジャンク・ウォーリアーのソリッドビジョンが無残に碎け散り、

遊星のモンスターはスピード・ウォーリアーだけとなった。

「行くぞ遊星！マサムネの攻撃！独眼流・紫電一閃！！」

マサムネの攻撃がスピード・ウォーリアーを捉え、一撃の元粉碎する。

と、遊星はとっさに罠を発動した。

「リバーズカードオープン！ガード・ブロック！！戦闘ダメージをゼロにし、デッキから一枚ドロロー！！」

「まだまだ！それでふせぎきつたわけじゃないぞ！マサムネが戦闘でモンスターを破壊したとき、攻撃力を半分にして直接攻撃できるダイレクトアタック！独眼流・電光石火！！」

「くっ！！」

遊星：LP2750

「俺はカードを二枚伏せターンエンドだ！さあ遊星！お前の本気を見せてみな！！」

遊次：LP4000

手札 2枚

モンスター スピリッツ・ヒーロー S・HEROマサムネ

魔法&罠 2枚

遊星は高鳴る鼓動に身を任せ、デッキからカードを引き抜く。

「俺のターン、ドロー!!」

TURN 1 英雄の再来 S・HERO（後書き）

唐突ですが、皆さんの知ってる英雄大募集！！

古今東西どこでもかまいません。

感想もどしどしください！

ガツチャ！次回また会いましょう。

グオレンダア！！

\*今回のオリカ

ネームレス・ソルジャー

効果・自分フィールド上のこのカードを墓地に送り、手札から「

S・HERO」と名のついたモンスターを1体特殊召喚する。

S・HERO マサムネ

効果・1ターンに一度、相手フィールド上のモンスターを1体選択すること、選択したモンスターとこのカード以外のモンスターをすべて破壊する。また、このモンスターが戦闘によってモンスターを破壊した場合、攻撃力を半分にして直接攻撃することができる。攻撃力はダメージ計算後、元に戻る。このカードをアドバンス召喚する場合、リリースするのは「S・HERO」と名のついたモンスターでなければならない。

**T U R N 2 星屑VS隻眼(前書き)**

ガツチャ、作者です!!!

投稿遅れてスンマセン…

夏休み短くて…(私立なので)

さて、相変わらず読みにくい駄文ですがお楽しみに!!!

## TURN 2 星屑VS隻眼

「俺のターン、ドロー!!!」

今、自分の目の前に立っているデュエリストは、間違いなく今まで戦ってきた中でもトップクラスの實力者だ。

一瞬でも気を抜けば、その時点で勝負を決められる。

ならば、自分のすることは一つだ。

遊星はドローしたカードを確認し、手札の魔法を一枚選び出した。

「魔法カード、調律を発動!!!デッキからシンクロンと名のついたチューナーを手札に加える!!!」

俺はジャンク・シンクロンを手札にくわえ、召喚する!!!」

「ジャンク・シンクロン 3 攻1300 守500」

「ジャンク・シンクロンの効果発動!!!このカードの召喚成功時、墓地から 2以下のモンスターを特殊召喚する!俺は 1のレベル・ステイラーを特殊召喚!」

「レベル・ステイラー 1 攻600 守0」

「更に、ジャンクと名のついたモンスターがフィールドに存在するとき、手札からジャンク・サーバントを特殊召喚できる!こい、ジャンク・サーバント!!!」

「ジャンク・サーバント 4 攻1500 守1000」

今、遊星の切り札への布石は揃った。

それは遊次も気づいていた。シグナーの龍の一体にして、デュエル・キング不動遊星の象徴とも言えるモンスター。

「俺は 1、レベル・ステイラーと、 4、ジャンク・サーバントに、 3、ジャンク・シンクロンをチューニング！」

「来るか、スターダスト!？」

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ!シンクロ召喚!飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン!」

「スターダスト・ドラゴン 8 攻2500 守2000」

「だが、スターダストは俺のマサムネとは互角だぜ？」

「まだまだ!装備魔法、白銀の翼!このカードは 8以上のドラゴン族シンクロモンスターにのみ装備でき、装備されたモンスターは1ターンに二度まで戦闘で破壊されない!」

「なにい!?つてことは...」

「バトル!!スターダストでマサムネに攻撃!シューティング・ソニック!」

今度はマサムネがフィールドから姿を消す。

だが、すかさず遊次は罨を発動する。

「スピリッツ・シグナルを発動！自分のモンスターが戦闘破壊された時、デッキから 4 以下の S・HERO を特殊召喚する！来い！S・HERO ベディビア！」

「S・HERO ベディビア 3 攻1750 守200 ち  
ユナー」

「ベディビアの効果発動！このカードの召喚、反転召喚、特殊召喚に成功したとき、デッキ、手札から、装備魔法、聖剣・エクスカリバー - を墓地に送る！！」

「…俺はターンエンドだ」

遊星：LP2750

手札 0

モンスター スターダスト・ドラゴン

魔法&罨 1枚（白銀の翼）

「よし、俺のターンドロー！」

「俺は手札から魔法カード発動、戦士の生還！墓地から手札に戦士族、ネームレス・ソルジャーを手札に戻し、召喚！」

「ネームレス・ソルジャー 3 攻1400 守1200」

「また上級HEROか！？」

「いいや。 3、ネームレス・ソルジャーに、 3、S・HERO」

○ ベディビアをチューニングー!!」

「戦士の思いが募るとき、無敵の騎士王が目覚めます…!! シンク  
口召喚!! 振りかざせ、S・HERO ペンドラゴー!!」

「S・HERO ペンドラゴ 6 攻2400 守2400」

「更に手札から魔法カード、武装再生を発動! 墓地の装備魔法を、  
俺のフィールドのモンスターに装備できる! 俺は墓地のエクスカリ  
バーをペンドラゴに装備、これにより攻撃力が1000アップ!」

「S・HERO ペンドラゴ 攻2400 3400」

「この為にさつき墓地に送ったのか! だが単純に攻撃力を上げる  
だけではスターダストは倒せない!」

「甘いぜ! バトル!! スターダストにペンドラゴで攻撃! カリバ  
ーン・スラッシュー!!」

遊星：LP 2750 1850

遊星のライフポイントが削られる。

だが、それだけではなかった。一度の戦闘では倒されないはずの  
スターダストがフィールドから消えたのだ。

「いつたい、なにが?」

「ペンドラゴの効果、ドラゴン・バスター。ドラゴン族と戦闘し  
た場合、ダメージ計算後、墓地に送る」

「それで白銀の翼の破壊耐性も、スターダストの効果も使えなかったのか…」

「ああ。だがペンドラゴの効果はそれだけじゃない。エクスカリバーが装備されたこのモンスターは、相手の魔法の効果を受けない。…ターンエンド。お前のターンだぜ」

遊次：LP4000

手札 2枚

モンスター S・HERO ペンドラゴ

魔法&罠 2枚（聖剣・エクスカリバー、伏せカード）

遊星は内心焦っていた。自分は切り札級のモンスターをことごとく封じられ、未だライフポイントを1ポイントも削れないでいる。おまけに、自分のカードはもう一枚もない。

（ここでモンスターを引けなければ…頼む！！）

「ドロー！！」

遊星は決死の思いで引いたカードを確認し、胸を下ろした。

「俺はロード・ランナーを召喚、ターンエンドだ」

「ロードランナー 1 攻300 守300」

遊星：LP1850

手札 0枚

モンスター ロードランナー

魔法&罾 0枚

「俺のターン、ドロ」

「攻撃力1900以上のモンスターは攻撃では破壊されないモンスター… っち、俺は手札からスピリッツ・リバースを発動！！墓地のS・HEROを1体蘇生させる。安心しろ、このターンはバトルフェイズを行えない。俺はS・HERO ベディビアを蘇生」

これでフィールドに2体の『騎士』が揃った。

そして、遊次のリバースカードが発動する…！！

「行くぞ、ペンドラゴがフィールドにいるとき、罾カード、ナイト・オブ・ラウンズを発動！」

「ナイト・オブ・ラウンズ！？」

「そうだ。ペンドラゴ以外のモンスター一体をリリースし、エクストラデッキから、このカードの効果でのみ特殊召喚可能な融合モンスター一体を特殊召喚する。現れる！！誇り高き円卓の騎士、S・HERO ルーカン！」

「S・HERO ルーカン 5 攻2100 守1200」

「ルーカンは1ターンに一度、フィールド上のモンスターの表示形式を変えられる。次のターンどうにかしないとお前の負けだぞ？ ターンエンド」

遊次：LP4000

手札 2枚

モンスター 2体 (S・HERO ペンドラゴ S・

HERO ルーカン)

魔法&罾 1枚(聖剣・エクスカリバー)

「俺のターン、ドロー!!!」

(よし!!!)

「俺はシンクロンエクスペローラーを召喚!」

「シンクロン・エクスペローラー 2 攻0 守」

「さらに、召喚時効果によりクイック・シンクロンを墓地から特殊召喚」

「クイック・シンクロン 5 攻700 守1200」

「2、シンクロン・エクスペローラーと、1、ロードランナーに、5、クイック・シンクロンをチューニング!!!」

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光さす道となれ!シンクロ召喚!粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー!」

「マジかよ!!!確かそいつの効果って……」

「シンクロ素材にしたモンスターの枚数分相手のカードを破壊できる!!!シンクロ素材は三枚!!!よってすべてのカードを破壊する!!!タイダル・エナジー!!!」

エクスカリバーを装備したペンドラゴも、耐性があるのは魔法のみ。

よって初めて遊次のフィールドがから空きになった。

「行け、ジャンク・デストロイヤー！デストロイ・ナツクル！」

「うおおお！！！」

遊次：LP 4000 1400

「ターンエンド」

遊星：LP 1850

手札 0枚

モンスター ジャンク・デストロイヤー

魔法&罨 0枚

ようやく攻撃が通り、遊星がLPで逆転した。だが、遊次はさして焦る様子もなく、それどころか満面の笑みを浮かべていた。

「久しぶりにやりがいのあるデュエルだ！！いくぞ、ドロー！！！」

「手札を全て捨て、S・HERO ルーフを特殊召喚！！！」

「S・HERO ルーフ 7 攻2700 守1200」

「このカードの召喚・特殊召喚に成功したとき、このカード以下の守備力のカードを破壊する！ブラスト・アンサラー！！！」

ジャンク・デストロイヤーの固い装甲を、ルーフの手から投げられた剣がいともたやすく貫き、爆散した。

「だが、このカードが特殊召喚された場合、俺の捨てた手札分相手はカードをドローできる」

遊星：手札 2枚

「行くぜ！！アタック・リタリエイター！！」

「俺は引いた速攻のカカシを捨ててバトルフェイズを終了する！！」

ルーフの鋭い一撃は、カカシに直撃し、攻撃を妨げる。

「ちい、ターンエンドだ」

遊次：LP1400

手札 0枚

モンスター S・HERO ルーフ

魔法&罫 0枚

「俺のターン、ドロー！！」

遊星の引いたカードは、起死回生の最後の切り札だった。

「魔法カード、星屑のきらめき！！このカードの効果は、墓地に存在するドラゴン族シンクロモンスターを選択し、そのモンスターと同じレベルになるようモンスターをゲームから除外し、そのモンスターを特殊召喚する！！ジャンク・ウォーリアーとジャンク・シ

ンクロンを除外し、再び飛翔せよ!!!スターダスト・ドラゴン!!!」

「スターダスト・ドラゴン 8 攻2500 守2000」

しかし、これだけではルーフを倒すことは攻撃力の差で不可能だ。

だが、攻撃力が足りないのなら、足してやればいい。

「更に手札から、ファイティング・スピリッツを発動!!!スターダストに装備することで、攻撃力が相手モンスター一体につき攻撃力が300アップする。バトル、シューティング・ソニック!!!」

遊次：LP1400 1300

「ちい、だがこの瞬間ルーフの最後の効果が発動。ルーフ召喚時、墓地に送った手札の中にモンスターがいた場合、その中から一体を特殊召喚できる。現れる、ネームレス・ナイト!!!」

「ネームレス・ナイト 4 攻1800 守1200」

(倒しても倒してもモンスターが途切れない...)

「ターンエンドだ」

遊星：LP1850

手札 0枚

モンスター スターダスト・ドラゴン

魔法&罫 1枚 (ファイティング・スピリッツ)

「行くぞ、俺のターン!!!」

(一応、何とかモンスターは繋げたが…手札なし、残りLP1000強…ここであれを引けなければ、多分俺は負ける。来いっ!!!)  
デュエリストとしてのプライドと、ありったけのラックが右手に集中される。

これが真のデュエリストが持つ、『運命力』と言う奴なのだろう。  
敵であるはずの遊星も、固唾を飲んで見守っていた。

「これが俺の……アルティメット・ドロ究極の引きだあああ!!」

デッキから引き抜かれた一枚。それを確認した遊次は、声を上げて笑い出した。

「ふふ、ハハハ!!行くぜ、まずフィールドのネームレス・ナイトの効果発動!!墓地のネームレスと名のつくモンスターを一枚手札に戻す!!俺はネームレス・ソルジャーを戻し、魔法カード発動!!無銘の意地!!フィールドにネームレスと名のついたモンスターがいる場合のみ発動でき、フィールドに存在するモンスターの数だけ効果が追加される。二体以上いる場合、墓地からS・HEROのモンスター一体を特殊召喚できる!!来い、マサムネ!!」

「S・HERO マサムネ 攻2500 守2000」

「相打ち狙いか!?だが、スターダストはファイティング・スピリッツの効果でバトルで一度は破壊されない」

「いいや、俺の勝利は揺るがないぜ!!無銘の意地の1体以上の

時の効果を発動！フィールドのネームレスを任意枚数墓地に送り、相手フィールド上のカードを手札に戻す！！俺はナイトとソルジャ―を墓地に送り、スターダストとファイティング・スピリッツを戻させてもらっ…っ！！」

この瞬間、勝負は決した。

そのとき、遊次のフィールドのマサムネが、わずかに目を伏せたように見えたのは、遊星の錯覚だろうか。

「行くぜ！！S・HERO マサムネの直接攻撃！！独眼流・紫電一閃！！」

マサムネの煌く刃が遊星を襲い、LPはそこをついた。

遊星：LP 1850 0

「…完敗だ」

遊星は右手のシグナーのあざを見つめ、呟いた。

悔しい。自分のエースたちは奮戦した。足りなかったのは、確実に自分の技術だ。タクティクス

この男、有条不紊は、間違いなく強い。

だからこそ、思えたのだろう。

彼となら、“ともに戦える”と。

## T U R N 2 星屑VS隻眼(後書き)

\* 今回のオリカ

### スピリッツ・シグナル

罾カード：自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊されたとき、デッキから4以下の「S・HERO」と名のついたモンスターを特殊召喚する。

### S・HERO ベディビア

チューナー/効果：このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功したとき、デッキ、手札から「聖剣」と名のつくカードを墓地に送る。このカードをリリースすることで、墓地の「聖剣」と名のつく装備魔法を手札に加える。

### S・HERO ペンドラゴ

シンクロ/効果：このカードがドラゴン族と戦闘を行った場合、ダメージ計算後墓地に送る。また、このモンスターに「聖剣・エクスカリバー」が装備されている場合、相手の魔法の効果を受けない。

### 聖剣・エクスカリバー

装備魔法カード：「S・HERO」と名のついたモンスターにのみ装備できる。

装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。

### ナイト・オブ・ラウンズ

罾カード：自分フィールド上に「S・HERO ペンドラゴ」が存在する場合、自分フィールド上に存在する「S・HERO ペン

ドラゴ」以外のモンスターをリリースし、エクストラデッキからテキストにこのカードのカード名が含まれている融合モンスター1体を特殊召喚する。

#### スピリッツ・リバーズ

魔法カード：このカードを使用する場合、自分はバトルフェイズを行えない。自分の墓地から『S・HERO』と名のつくモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

#### S・HERO ルーカン

融合/効果：「ナイト・オブ・ラウンズ」の効果でのみ特殊召喚することができる。1ターンに一度、フィールド上のモンスターの表示形式を変更することができる。また、このモンスターが攻撃表示のモンスターを破壊した場合、攻撃力分のダメージ、守備表示モンスターを破壊した場合、守備力分のダメージをそれぞれ相手に与える。

#### S・HERO ルーフ

効果：自分フィールド上にカードが存在しない場合、このモンスターを手札から特殊召喚できる。その時、手札をすべて捨て、その枚数分相手プレイヤーはドローする。この効果で特殊召喚したこのモンスターがフィールドを離れたとき、このカードのコストとして墓地に送った手札のなかにあったモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚することができる。このモンスターが特殊召喚に成功した時、このカードの攻撃力より低い守備力を持つモンスターを1体破壊することができる。

#### ネームレス・ナイト

効果：1ターンに一度、スタンバイフェイズ時に墓地の「ネームレス」と名のついたモンスター1体を手札に戻す。

## 無銘の意地

永続魔法カード：自分フィールド上に「ネームレス」と名のつくモンスターが存在する場合のみ発動することができる。自分フィールドに存在する「ネームレス」と名のつくモンスターの数により、以下の効果を得る。

1体以上：フィールドの「ネームレス」と名のつくモンスターを任意の枚数墓地に送り、相手フィールド上のカードを手札に戻す。

2体以上：1ターンに一度、自分の墓地から「S・HERO」と名のつくモンスターを特殊召喚できる。

3対以上：ドロウする代わりに、デッキから「ネームレス」と名のついたモンスターを手札に加える。

5体：相手はバトルフェイズを行えない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6882v/>

---

遊 戯 王5D's 外伝 スピリッツ・クロス

2011年10月8日20時04分発行